

春日部福音自由教会 2020年10月4日 11:00 中央会堂礼拝（同時配信）

聖書 新約聖書 テモテへの手紙第2 3章10節～17節

説教 「あなたを諭す人」 高橋敏夫名誉牧師

今朝拝読された言葉は第二テモテの3章10節から17節でございます。ここから「あなたを諭す人」という説教題で語らせていただきます。

序 励ましの諭し

皆さんが実感しているように、今ウイルスの病原菌だけではなくて、経済においても、政治的なことも含めて、本当に騒がしいですね。まあそれが、今この時生かされている世界の状況です。そう実感しています。

私は高校生2年の時に、母を天に送りました。その母の葬儀の時に、私に洗礼を授けてくださった松田政一という私の尊敬する牧師先生が、開口一番「高橋君は大損をした。なぜなら、もう本気で高橋君を叱ってくる人がいなくなったのだ。」ということをおっしゃられて、私はその時のことを、本当に忘れられないんですね。松田政一先生のおっしゃったことは「本当にそうだな」ということ、今になっても痛感しています。でも、もうその頃から私は、毎日聖書を読む生活に入っていましたね、そして今日までずっと聖書を読み続けて、今日も聖書を読んで新鮮に諭されました。聖書自身が、今日の今日まで私を諭してくださり、今日もこの講壇に立たされているのです。このことが幸せですね。母の「敏夫ちゃん！」というその声は、もう聞こえなくて寂しいですけども、この私がずっと手にしてきた聖書は、いつもいつも私を諭してくださっています。で、この10-12節は、パウロがテモテに対して、牢獄からまあ叱るように諭しているわけですね。10節を読むと「しかしあなたは、私の教え、生き方、計画、信仰、寛容、愛、忍耐に、、、」とあります。9つのテモテに対する励ましの諭しが書かれているようです。信仰の先輩として、テモテのために祈りながら書いたんだと思います。

1 テモテへの励まし 9つのポイント

“私の教え”という時に、パウロのオリジナルの教えというよりも、パウロがイエス様から委ねられ、委託された福音のことですね、「この私があなたに今日徹底的に教えたことからずれるなよ」というわけです。

“生き方”っていうこの言葉の中にパウロがこめていた思いは、「あなたの人生の目標、人生の計画を狂わせるなよ、計画がずれないためにはどうしたらいいか、それはイエス様のお言葉に従うしかないんだからね」。人生設計というのは、何か自分で、今の時代はね、みんな自分でこうだああだ、でもねほとんどね、テレビに皆さんの思考は毒されてると思います。ほとんど。それから、はやる本に毒されていると思います。それはすごい影響力だと思います。これは聖書を読む者として、非常に強く感じていることです。だからパウロは“生き方”っていう時に、パウロ自身がどんな生き方を見せたのか、徹底して徹底して「イエス・キリストに従うという生き方」ですよ。そこに妥協がないんです。

だから自分の計画に従って、自分の計画をして、それ今皆大体それやっています。でもここで言う“計画”っていうのは、私たち一人一人に、創造者であられる神様がもっておられる、人生を与えてくださった方のご計画がある。そのご計画を発見してそこに生きることが“人生設計”だ。これもね、相当僕たちずれてると思う。キリスト者自身が。イエス様を信じていても、イエス様を信じていながら、実は自分の計画に従ってるから、いつもずどんと落ちるところに落ちちゃう。「神を愛する人たち、神のご計画にしたがって召された人たちのためには、すべてのことがともに働いて益となることを、私たちは知っています。」とパウロはローマ8章28節ですよ。で、ご自分の人生設計について、揺らいでないですよ。「全てのことを神様が益としてくださるんだ！」。

そして次に出てくるのが“信仰”。これは言うまでもなく「神様のあわれみの御手の中にあるというやすらぎ」ですよ。何があっても、そこにとどまる。

“寛容”。これはいろんな言い方ありますけど、「あ、傷つけちゃったな」って思う人に対する看護、手当てですよ。いろんな言い方ありますけど。

“愛”。これは、聖書のテーマですけど、“愛”っていうのは、三位一体なる神さまを信じているっていうことが“愛”なんです。なぜならば、そこに、“愛”があるからです。愛の発信源なんです。愛は、三位一体の神さまを信じていることなんです。それを表現できる人が、キリスト者。

“忍耐”。これは逆境の中で、イエス様といつも共に歩んでいるってことですね。それは忍耐です。ただ「この嫌なことから、神様、逃れさせてください」って祈ることが忍耐じゃない。そこに留まって、その痛みを辛さを孤独を、感じ受けとめることが“忍耐”です。それはイエス様の御生涯で、福音書はそのことを本当によく私たちに教えてくださってますよね。忍耐とはなにか。

“救い”。これはもう言うまでもなく、“永遠の命”ですよ。永遠のいのちの確信がなかったらね、救われているっていう、何て言うのかな、生きがいは感じられないでしょ。「苦しむ者が叫ぶとき、主は聞かれる。苦しむ者が叫ぶ時主は聞かれ、すべての苦難から救い出してください。」先日天に召された宇田川信子さんがずっと持ち続けていた信仰はこれだって私は思いましたね。だから彼女が天に召されるギリギリのところでの言葉で礼拝をささげました。

“迫害”。テモテはパウロに従って伝道者としての務めをしながら、現実にはパウロがどのように迫害に接しているかってことを、よく知る目撃者でありました。だから12節で「キリスト・イエスにあって敬虔に生きようと願う者はみな、迫害を受けます」。アンティオキアとイコニオンとカリステラとかで、これすべてテモテとパウロが、テモテも一緒に経験したかどうか定かでないところがあるんですが、そのような直面している迫害に、いかにパウロは忍耐して、キリストの証人として働いていたか。「私たちは神の国に入るためには多

くの苦しみを受けなければならない」と、パウロは使徒の働きで言っています。またイエス様ご自身が、大勢の人たちに対して説教される大切な言葉として「義のために迫害される者は幸いです」。イエス様はマタイのあの有名な5章10節で、「迫害を受けるといことは幸せなんだよ」という逆説的なおっしゃり方をされてるんですね。ここで僕今日、とって今今朝の説教で感じ取ってることを言います。伝道者として召された人は、物欲、金銭欲、名誉欲をイエス様の心に従わせる。イエス・キリストに従うということは、そうした様々な欲望を切り捨て、捨て切って生きる訓練、生活。これ何でもないこと言ったんですけど、すごく、特に牧師献身者としてこれからイエス様に従って行こうと思う者には、大切な大切な戒めです。私がこの訓練をするようになったのは、高校生の時ね。「学校に聖書を持ってけ」と言われたんですよ。その頃から大体このくらい厚い聖書、毎日鞆の中に聖書を入れて学校に持って行った。ちょうどその頃ね、創価学会がね、ものすごい勢いで信徒を増やし、政治の世界にも入っていきこうとしていた時代。共産党、社会党も元気よくて、高校生のなかにもクラブを作る時代だったんですね。私もすごく刺激受けました。でも僕毎日聖書を学校に持って行って、自分の座ってるの前の席に聖書置いて。だから、教師は嫌でもこの聖書が目に入るんですね。だから嫌われました。その頃の僕のあだ名はもう「牧師」です。牧師になる前から。そのおかげで学校の中に聖書研究会できて、救われる人起こされたんですよ。

13-15節、ここには「悪者たちや詐欺師たちは、だましたり、だまされたりして、ますます悪に落ちて行きます」。教会が墮落し、腐っていくのは内部からです。忘れてはいけないのは、エデンの園でもう墮落があったんですよ。そこにサタンが働いてたのを忘れてはいけません。だから今まで僕はキリスト者として、多くの団体とか聖会というようなものなどにも参加させていただきましたけど、そこにも腐敗がありましたからね。この教会、大丈夫でしょうかね、私たちの内部に腐敗はないでしょうか。そういうことをいつも見て、警告し、み言葉を語るのが牧師です、伝道者です。だから、牧師の務めは皆さんにおべんちゃら言うことではありません。悪い者たちや詐欺師、すごい言葉でしょう。これも聖書の中にそういう人達が出てきてるわけですよ。騙したり騙されたり、教会にあってはならないことが現実に起こった。そして悪に堕ちていく。私たちの教会大丈夫でしょうかね。墮落は偽教師によって始まってくんですよ。でもそれはね、この世界の現実の雛形でしかない。私たちはこの現実の中に、キリストのからだであるきよい教会が建て上げられているんです。だから戦いが必要。

“信仰の戦い”。14節「けれどもあなたは、学んで確信したところにとどまっていなさい。あなたは自分から学んだかを知っており」とありますが、テモテは誰から学んだのか。あえて「学んで確信したところに」。これは信仰の戦いですよ。自分が与えられて、確信しているところにいつもとどまりつづける。創造者であられる神様が、時にはその時代を滅ぼし、時には回復、復興させて平和と思われるような時代も経験します。しかしこの世がどんなに大きく揺らいだとしても、そうした中で守り続けていくくださる方は、父なる神、子なる神、聖霊なる神、創造者なる神様ご自身であるという、この確信から連なっているということ、パウロは言おうとしています。すごくシンプルなことです。テモテ自身が牧会していた教会は、エペソという聖書と全く関係のない大都市の中ですが、伝道者として牧師としての務めを委ねられおられます。そういう中でイエス・

キリストを表現する表現者として、テモテは、パウロからエペソに遣わされて、その教会の牧師でありました。だからテモテに求められていたのは、今まで幼い頃から知らされていた聖書の世界と全く違う、その世間の中でキリストを、聖書の教えを、どういう風に表現していくかという、その芸術家のような生き方が求められているわけです。いわゆる異邦人の社会のただ中で、キリスト者としてどういう風に振る舞い続けたら、それが伝道になるのか、証しになるのか、滅びていく人たちのいのちを救うことになるのか、っていう問題であります。

テモテが、いつも悩み、祈り、苦しみ、痛みを感じていたのは、異邦人の社会の中で、自分が信じている、イエス・キリストを信じるその信仰を、どのように適用するかという戦いですね。これは僕が、この教会の牧師になって今日まで、今日の今日まで戦い続けてきた現実です。それは苦勞でしたね。苦勞のほか何ものでもない。

第一義的に言えば、聖書の教師は、テモテにとってはパウロです。パウロ自身が教師となって、イエスと出会って、イエス様から託された福音の言葉を教えられたのです。そしてテモテは、パウロと苦樂を共にする生活を通して、パウロの信仰を深く学ぶことができたはずですよ。パウロがテモテに教えたのは、イエスキリストの權威が伴う教えであった。だからそれは、初代教会が大切にしてきた使徒としての權威、權威ある聖書の解き明かしを受けることができたという、これは見逃してはならないことなんですよ。

3 臨在教育

もう一つ大切なことは15節「また自分が幼い頃から聖書に親しんできたことも知っているからです」これはね、意外とずっと読み過ぎるんですけども、ちょっと止まらなければならないことです。皆さんの家はちゃんと聖書教育してます？ 子どもたちに。

僕はめぐみ幼稚園の責任者だった時代は、臨在教育と呼んでましたけどね。テモテは、家庭で臨在教育を、おばあちゃんやお母さんから学んでいました。お父さんがいないのは多分異邦人だったからだと言われています。家庭の中で、彼は神様を敬う、神様に愛されていることを学んだんですね。みなさんの家庭にそのかけらくらいはありますか？ 臨在教育、それはみことばを静かに黙想し続ける、祈り続けるということです。神の臨在を受け止める。すなわち黙想して神様の強さを、神様の愛を、力を、身に感じ取って生きるというその修行です。

これね、カルビンあたりからね、私たちにね、信仰は頭に来てしまったというか、神学優先主義になった。“自分はこれだけ理解してるんだ”って、解き明かすようになった。それは全然自分の体に入ってないんですよ。肉になってないものは空しい人の考えです。どんな本を読んで学んだとしても、それがその人自身の愛となり力となりきよさとなり、いのちとなっていなければあなたの信仰は無に等しいということです。全人格的に修行させていただくことが、礼拝と祈りの修行です。聖書の黙想をして心から生まれてくる信仰は、「ごめんなさい。何も知りません。」という告白です。

今日礼拝に来てね、教会生活ちゃんと守ってるから私は立派な信仰だなどと思っただけは、パリサイ人と一緒だよ。神様の基準から見たら、そんなもん(ちょっと言葉が足りないから誤解されたくないんですけども、)決められたことを忠実にして、忠実にしたいと思ってるから私はマシなクリスチャンだと思ってる人は、それ

が間違いだって言いたいのです。だから本当にみことばを黙想し、自分の中にとどまってみことばによって促された言葉ですよ。本当に賛美する人は体験してるように、それが歌となり、賛美となり、最高の奉仕になるんです。

4 聖書は神の靈感によって

16 節 17 節「聖書はすべて神の靈感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練のために有益です」「神の人がすべての良い働きにふさわしく、十分に整えられたものとなるためです」

聖書は神様の愛の手紙である、啓示であると言われて久しいですね。私はそのように学んできました。“聖書はすべて神の靈感によるもの” と言う、靈感によってということばは、神様の息吹、いのちの息吹そのものによってと言う意味です。だからもっと意識すれば、“聖霊なる神様のご差配の中で、聖書はすべて監督されて記されたんだ”。これで理解できましたか。聖書は初めから終わりまで聖霊なる神様の監督のもとに、支配されて書かれた。人間が書いたんだけど実は神様ご自身のいのちの息吹によって、このように私たちにわかる言葉で与えられている。これが聖書はすべて神の靈感によるという意味で、だから私たちに益する書物なんだという断定的な言い方ができるんです。

僕は本を持ってる方ではないんですけども、僕の書斎にある本は、ただ一冊のことに向けられている。ただそこにある本は、イエスに向いてるんですね。

ペテロは「人間の意思によってもたらされたものではなく、聖霊に動かされた人たちが神から受けて語ったものです」と、彼自身の信仰を告白しています。ペテロ第 2 の手紙の 1 章の 21 節のことばです。

創世記から黙示録までの 66 巻が聖書として制定され、神のことばとして信じられてきたことは、これは教会が会議をして決めたことではないんですよ。事実をよく調べると、その当時の教会に集まった時には、私たちが手にしている 66 巻があったんです。すでに。そして 66 巻を神のことばとして信じていた。それが教会の告白なんです。カソリック教会は外典というものを参考書として持っていますけれども、カソリック教会も私たちと同じ信仰です。66 巻の聖書以外を、カソリックの人たちも神のことばだとは信じていません。これははっきりさせてください。聖書は神のことばとして教会が決めたのではない。不思議ですね、神様のおことばとして他のあらゆる書物から分けられたものとして受け止められていたのです。これが教会の奇跡ですよ。教会が制定して神様のことばとして宣言したのではありません。歴史的な事実はまだ 66 巻はキリストの教会の中に備えられて、与えられていた、教会は所有していたということ。この事実には私たちの信仰は基づいているのです。

5 神の人となるために

16 節「教えと戒めと矯正と義の訓練のために有益です」。聖書は、神の人を造るための教科書です。具体的に、どんなことが教えられているか、どういう戒めがあるのか、何が矯正されなければいけないのか、どんな訓練が必要なのかという。この 4 つの規範から、神の望んでいる人を造るために聖書があるのです。17 節にあるように「神の人が十分に整えられたものとなるため」なのです。

僕はある神学校の卒業式の説教者として呼ばれた時に、生意気なこと言ってしまったんですよ。「諸君、生涯を通してこの聖書をマスターしようぜ」。できるわけないんだけど、「そのくらいの気持ちで、卒業した後も聖書に親しんでいこうよ」って。いまだにその学校の教授たちが「聖書マスターしていますか」なんて僕を冷やかしますね。辛い訓練ですよ。字面学ぶことじゃないですから。本読むことじゃないですから。神学、哲学、人間のそういう複雑な思想を理解することじゃないんですよ。聖書は、神の人となるために諭して下さっている書物です。

天の父なる神様、今朝の礼拝を感謝致します。神の人として私たちを整えてください。神様にいよいよ近づき、聖なる者とさせてください。世の混乱の中で私たちに静けさを与え、秩序ある生活をさせて下さい。当たり前のことを当たり前にする人間とさせてください。この祈りを、主イエス・キリストの御名によっておさげします。アーメン。